

閃光戦隊ジュエルスターズ

①閃光戦隊・見参!

秋津 透



富士見ファンタジア文庫

イラスト 新田真子



富士見ファンタジア文庫

せんこうせんたい
閃光戦隊ジュエルスターズ

せんこうせんたい けんざん
①閃光戦隊・見参！

平成元年 8 月 25 日 初版発行

平成 3 年 12 月 20 日 四版発行

著者——あきつ とおる
秋津 透

発行者——中井茂雄

発行所——富士見書房
〒102 東京都千代田区富士見1-12-14
電話 03(3261)5375(代表)
振替 東京7-86044

印刷所——新興印刷

製本所——本間製本

落丁乱丁本はおとりかえいたします

定価はカバーに明記してあります

©1989 Fujimishobo, Printed in Japan

ISBN4-8291-2322-2 C0193

閃光戦隊ジュエルスターズ

①閃光戦隊・見参！



富士見ファンタジア文庫

絵・本文イラスト
新田真子

目次

1	とにかく見参！ 閃光戦隊 ジュエルスターズ	5
2	あなたもなれます、正義の戦士 スーパー・ヒーロイン	29
3	正義の都合 悪党の事情 こちら	52
4	成り行きまかせで大暴走 とつてもあぶないあのど・すたろー	73
5	脅威の完全重武装変態 げきとう	100
6	激突！ 嵐の攻防戦 あらし	122
7	さあさあ、どうする、どうしよう？	154
8	そして、太陽はまた昇る ひ	172
9	何が何でも強行突破 ぶちやぶれ	198
10	閃光戦隊突撃せよ ジュエルスターズ・アタック！	229
	エピローグ・そして静寂 サイレンス	258

あとがき（みどりちゃんの作者直撃インタビュー）

262

1 とにかく見参！
閃光戦隊^{ジュエルスターズ}

「参^{まゐ}ったなあ。すっかり日が暮^くれちゃった」

坂道^{まんなか}の中央^{まんなか}をとことこと登^{のぼ}ってきた小柄^{こがら}な少女は、小さく首^{くび}をかしげて夜空を見上げた。「もーとつくに着^きいていいはずなのに、おかしーなー。やっぱり、道を間違^{まちが}えちゃったのかしらん」

呟^{つぶや}きながら、少女はくりつとした丸い目で周囲^{あたり}をきよろきよろと見回す。やたらに明るい街灯^{ライト}の下、白いガードレールと、三月中旬^{はるさき}の陽氣に花をほころばせかかっている桜並木^{ソメイヨシノ}、そして無表情^{ステロタマ}なオフィスビルが延々と続いているが、通行人^{つうぎん}の氣配はまったくない。

「うーん、人間^{ひと}がいないんじや、道順^{みち}も訊^きけないな。噂^{はなし}に聞いてたとおり東京^{こっち}は夜でも明^あるいけれど、思ったほど人間^{ひと}は歩いてないのねー」

通行人^{つうぎん}もいないのに、こんなに街灯^{でんき}つけとくなんて浪費^{もったいない}だなー、などと言いながら、少女は再びとことこと歩きだす。言葉に詭^{なま}りはないようだが、野暮^{やぼ}つたい紺^{こん}のセーラー服に、

大きな風呂敷包みを背負い、おまけに両手に紙の手吊げ袋を二つづつとゆー、どっからどー見ても田舎者でござーますだの姿である。

と、少女が坂を登りきった時、その背後から唐突に薙猛な轟音と光輝が迫ってきた。きよとんと振りかえった彼女のどんぐり目を、凄まじい速度で突っ込んでくる、ヘッドライトがまともに射る。

「あらららーっ」

さすがに慌てて、少女は道路の端に身を避けようとした。が、勢い余ってガードレールに衝突し、そのままどべつと側溝の脇に転倒する。その身体をほぼ間一髪でかすめ、坂を登ってきた自動車は、とんでもねー速度で彼女を追い抜いて行った。

「ぐー、痛つつ……」

顔をしかめて、少女はどっころしよと立ち上がる。と、そのとたん、ぐわしやーんという凄まじい破壊音がしたかと思うと、まだ半分眩んでいる彼女の視界にオレンジ色の炎がぼんやり映った。そして数秒の間をおいて、今度はドドーンツと派手に爆発する。

「きゃっ！」

ほとんど反射的に、少女は目をつぶり耳をおさえてしゃがみこんだ。どうやら、今、彼女を追い抜いて行った暴走車が、事故を起こしたらしい。と、両手でおさえた彼女の耳に、

甲高く耳障りなサイレンの音が、小さく、しかし確かに響いてきた。

「警察？」

東京の警察つてずいぶん手回しがいいのねー、と少女は感心した表情になって再び立ち上がる。その目の前に、灰色の車体に回転灯を載せた覆面パトカーが現われた。パトカーは少女の立っている位置をわずかに行き過ぎて停まり、車扉が開くと同時に二人の人影が出て来る。

「どうやら奴さん、勝手に事故ったようですね、警部補殿。これは手間が省けて、いや、よかったよかった」

右側の車扉から出て来た太った男が、前方の炎を見やって、のんびりとした口調で言った。と、左側からとび出した細身の女性が、鋭い声で吐りつける。

「油断するんじゃないのっ！ とにかく犯人の状態を確認するまでは……うっ！」

その瞬間、女性警官のすぐ鼻先、30センチと離れていない道路面上に、どごーんと凶悪な音をたてて銃弾が喰いこんだ。目いっぱいひきつりながら、しかしさすがに素早く、女性警官は車の陰に身をひそめる。相棒も慌てて窮屈そーにかがみこみ、ついでは一般市民の少女もガードレールの陰に身体を縮めた。そのとたん、一本調子の馬鹿笑いが三人の頭上に轟く。

っ！ 太平洋戦争末期に生産されたものの、ほとんど実戦配備もされなかった幻の銃が火を吐く光景を、まさかこの目で見れるとはっ！ うううっ、感動するなーっ」

「こらーっ、小原巡查っ！ 呑気に感動してる場合じゃないでしょーっ！」

女性警官が拳銃を抜きながら、金切り声をあげる。そのとたん、彼女のすぐ傍で、パトカーの回転灯がばりーんっとなぐれた。

「警部補殿、気をつけて下さい。敵は仮にも対戦車ライフルですからね。一発くらったら、人体なんてあっさり四分五裂にされますよ」

小原巡查は再びのんびりした口調に戻り、ひきつりまくる女性警部補に声をかける。と、巡查のすぐ横のガードレール越しに、彼に劣らずのんびりとした声が聞こえた。

「でも、変ねー。九七式自動砲って、確か単射はできないんじゃないかなー。一分間に二十発ぐらいのとっろーい発射速度だけど、とにかく連射専用だったと思っただけど」

「……そういや、そうだな。よく知ってるねえ、君」

こんな少量生産型の銃に詳しいなんて変人だなーと、自分のことは完全に棚に上げ、小原巡查は後方を見やる。風呂敷包みを背負って屈みこんだ少女は、彼の顔を見てにこにこっと笑った。か、可愛いじゃないか、と小原巡查は、銃撃戦の真最中とゆー現実をこころと忘れて少女に話しかける。

「銃器とかに興味、あるのかな？ 自慢じゃないけど、僕は銃器関係には詳しいんだよ。」

あ、僕は小原昭之助というんだ。君は？」

「はい、夜鳥みどりっていいまーつす。よろしくお願いしまーつす」

小学生か新人歌手みたいな調子で、少女は元気良く自己紹介して、ぺこりと頭を下げた。

「いやあ、こちらこそ、よろしく」

「ちよつとちよつとっ！ いったい何やってんのよつ、この忙しい状況にっ！」

丁寧に礼を返す小原巡査を、女性警部補がヒステリー寸前の声で怒鳴りつける。だが、

小原巡査はごくのんびりと応じた。

「忙しい状況っていつても、何も作戦ないみたいですよ。敵の弾が尽きるか、応援が来る

か、とにかく状況が変わるまで、手も足も出ないでしょう？」

「だからってつ、女の子とおしゃべりしていいってもんじゃないで……あっ！」

その瞬間、どーんっと轟音をあげ、対戦車用の20ミリ弾が容易にパトカーの前部鋼板

をぶち抜く。たちまち、ぼむっと、エンジンから炎が上がる。

「やばいっ！」

叫びざま、案外機敏に小原巡査はガードレールを跳び越えかかった。が、がつんと足が

つかかり、あつけにとられている少女の上にまともに落ちる。



「はははははは」

「くうっ……」

警部補は片膝を立てた姿勢で振りかえり、哄笑しながらゆっくりと迫ってくる筋肉男を蒼白な顔でにらみすえた。その表情が、ぞくつとするほど凄絶で、美しい。

「変態の餌食にされるぐらいなら、舌噛み切つて死んでやるからっ！」

完全に本気の口調と表情で、警部補は小さく口走った。その呟きが耳に入ったのかどうか、筋肉男は相変わらず哄笑しながら、ずんずんずんと彼女に近づいてくる。

と、その時、白い人影が閃光のように路上に飛び出した。筋肉男が素早く右手の自動砲を向けるが、白い影はそれよりも更に素早く変態の手元に躍りこむ。手にした長い棒のような武器が、筋肉男の右腋下と喉元を続けざまに激しく突く。

「ぐげえっ！」

変態男の右手からぐわらっしやーんと派手な落下音をたてて、九七式自動砲が離れる。

同時に左手で喉元を押さえ、男は遅ましい肉体をのけ反らせた。その顎を白い攻撃者の棒が、正確にがぶつと突きあげる。倒れるところを、容赦なく股間にずどつと棒を突きこみ、鳩尾のあたりをずんと踏みつけ、そして初めて謎の攻撃者は唸るように声を出した。

「ふうっ、しぶてえ、しぶてえ。技術はなっちゃいねーが、この変態、肉体だきやあ確か

に鍛えてやがんな」

「あ、あなた、いったい……」

警部補が、当惑しきった声を出す。目の前の人物は、白い覆面で鼻から顎を包み、白を基調にしたレオタードのような衣装を身につけている。体の曲線と、今呟いた声からすると若い女性のようなだが、背が高く、肩幅もがっちり広い。それが、長い棒状の武器を背負うように持ち、踏んづけた筋肉男を鋭い眼光で見おろし、巻き舌の男言葉でぶつぶつ呟いてるとなれば、これはもう完全な正体不明の怪人である。

「あなた……一体、何者？」

「私たちは閃光戦隊ジュエルスターズ」

背後から声をかけられ、裸同然の女性警部補は慌てて振りかえった。オフィスビルの横の闇溜りから、人影がゆつくりと歩み出る。白覆面の女性とほとんど同じ格好だが、こちらには紺碧色を基調にしており、武器らしいものは持っていない。すらりとした優雅な姿の、やはり若い女性だ。

「お初にお目にかかります。私はジュエル・サファイア。彼女はジュエル・ダイヤモンド。正義に燃え、悪を懲らすため立ち上がった者です。どうぞ、今後よろしくお見知りおき下さいね」